

深田技師の面影

水郷松江は宍道湖を控へて古來有名な景勝地である。此の松江大橋工事に殉職した深田清氏は、福岡縣中間町に生れ、幼にして父と別居し母堂1人の手に愛育されたが、小學時代から中學まで級長で通し溫厚なる秀才であつた。

第三高等學校を経て、京都帝大土木學科を卒業し、直に島根縣土木課に奉職、一意專心土木技術に精進してゐたが、其學識手腕は早くも上司に認められ、昭和6年館ヶ崎橋のT型鐵筋コンクリート單桁橋の設計を初め、横田橋、新大橋、雪舟橋、三刀屋橋、古城橋、森坂橋、鳥屋川橋、濱田橋、松江大橋、出羽橋、寶來橋、福富橋等島根縣に於ける近代的橋梁の多くを設計して優秀なる成績を挙げてゐる。

島根縣を訪ぶ人は此等の橋梁に就て深田技師を偲んで貴ひ度い。工事に熱心なる人が工事に倒れるは元より本懐至極ではあらうが、然し深田氏の最後は餘りに悲惨であつた。

當時の島根縣土木課長寺田甫氏は記念出版『深田清君の面影』の中に次の如く記されてゐる。

『僕は思はず走り寄つて額の覆布を除き「深田君濟まなかつた」と遂に其場に聲を出して慟哭してしまつた。前途ある同君は未だ技師にもならず、妻帯もせず、年老ひし唯1人の母親に孝養を盡しつゝ此松江大橋を設計し、亦監督しつゝ遂に天職に殉じて尊き犠牲の人柱となり、31歳を1期として敢無く天に昇つてしまつた。

嗚呼想ひ出すも涙の種である。其の前日第一號橋脚基礎岩盤に達したるを喜び現場にて記念撮影を爲し、當日は早朝七時に既に凡ての準備手配を

終へ、助手一名、人夫二名と共に橋上より六十尺下の工事場に入り、自ら親しくコンクリートの練工合を足で踏み固めつゝ少し軟かいね等と評しつゝあつた時、あゝ何たる事ぞ、突如十六貫目もある空バケツは如何したハズミか上昇の途中フックを外れて翻筋斗打つて落ち来り、アツと云ふ間もあらばこそドーンと云ふ大音響と共に只深田君一人の姿は無くなつた。隣に並び居た助手はハツと氣付き「深田さん」と呼べど答なく、バケツトを轉がし見れど更に姿がない。丹念に探しは深田君はカーブシューの尖端にビツタリ喰ひ込まれて居る。急ぎ引き出せば頭部は二つに割れて已に締切れていた。助手は氣丈に其の柄櫛の如き創口をビツタリ合せ、己がハサカチを口もて刺きシツカと括り、バケツに深田君と共に乗り、七メートルの上に昇り、直ちに赤十字病院に搬ぎ込んだけれども既に週く、幽明境を異にし再び談り合ふ事は出来なかつた。



深田氏殉職記念に橋脚に埋せる浮彫銅版肖像

運命の神は餘りにも悲惨な事をするものである。深田技師の殉職は先輩同僚、友人諸氏から多大の同情を寄せられ、其英靈は充分に慰められてゐる事と思はれるが、工事に關係する技術家には種々なる教訓を與へられた事である。尙ほ松江大橋工事に就ては工事畫報昭和12年1月號を參照され度い。(編者)